

茶の湯研究初歩の瀨踏み

——茶道史研究文献収集途上における印象と見通し——

岡山大学文学部プロジェクト研究発表会

日本における美的概念の変遷——芸道の成立を巡って
平成十六年十一月二十四日(水) 於文学部会議室

山本 秀樹

はじめに

タイトルは、雰囲気的に、国学者の著述、あるいは、歌舞伎浄瑠璃の外題をかすめて付けてみました。

さて、七月二十八日の山口和子氏発表「茶の湯とポップ」を聴いて、私は突然「茶の湯」について勉強してみる気になりました。

突然と言っても、私が一応専門としております、上田秋成という人——申すまでもなく『雨月物語』の作者として、日本文学史上では著名な江戸時代中後期の文人ですが——この人が『清風瑣言』という、茶道史、特に煎茶道史上では割合有名な、茶に関する刊行書を書いておりまして、これに一応、学部生の時以降、何度か眼を通しはしましたが、それに関して特に勉強するということは、今まで放置しておりました。

と申しますのは、学生の時に、勉強がてら一度きり行った茶の先生のところのお稽古の、お弟子さんたちとの間の、ぬっぺりとした、とても申しましようか、その社交的雰囲気、どうも田舎育ちの粗野な私には合いません、どうも茶は苦手だと思っていたことと、どうせ秋成はそうした道としての茶を嫌っているのだから、と思っていたところからなのですが、敵を知り、己を知れば何とやら、で、その意味、まあ、今回は、私の専門分野にとつても良い勉強の機会なのです。

山口先生の発表を聴いて、「茶の湯」について勉強してみる気になった、と申しましたが、それは、何よりも、第一に、私の側の「茶の湯」に関する基本的知識の欠如と、発表会の時間的制約によるのでしよう、山口先生

の発表の説明が(研究会の発表としては当然のことでしょうが)切り詰め気味であったことと、美的説明のちよつとした難解さと、よつて、山口発表の内容を、自分が、とても理解できたとは思えなかったからです。それはつまり、山口発表の持つ内容がどの程度の的確性を持つのか、が全く判断できなかった、ということなのです。

私自身は、本プロジェクトの最初の会合の折にも申し述べましたように、プロジェクト開始時には、室町から江戸中期までにおける「風流」という美的理念語に関して考えてみようか、と思っておりましたので、本日の発表に関する準備期間は、山口先生の御発表から本日にいたる、わずか、この4ヶ月ほど——しかも、この間、教員個人評価点検報告書の作成のため3週間以上をほとんど無駄に費やしましたし、授業・授業準備・会議等の通常業務も、また、その他業務も、しておりましたし、他の報告論文執筆の準備作業や自分の先生の著作集の校正作業なども行っておりました。したがって、まったくの時間不足により私の知識は全くの付け焼き刃ですし、また、正直なところ、「茶の湯」研究全般に渡る把握は全くできておりません。それどころか、まだ、研究レベルで使える茶道史の概説書、あるいは、研究入門書をさがし続けている段階です。

しかしながら、このプロジェクト研究は、お互いの情報交換の場として機能するようにもするというのが、当初からの目論みでありましたし、また、他のメンバーとて、全員が全員、「茶の湯」研究のための素養を充分に備えているというわけでもないでしょうから、極初歩的なところから述

べてみても、本研究会における報告の目的は果たされるということになります。——ですが、もし、私にだけ素養がなかったのだとしたら、非礼の段は何卒御容赦下さり、ひらに、本日は御指導御教示を賜りますようお願い申し上げます。

いまだ先行研究文献を集めている最中ではありますが、本日は現状報告を行っておこうと思います。

茶道に関する、研究レベルのシリーズ物として、

『茶道学大系』全十一巻（淡交社、一九九〇〜二〇〇一）

というものを見つけました。附属図書館の芸術分類の棚の前をぶらぶらしてみたのです。出版年を見ればおわかりいただけるか、と思いますが、極めて最近のもので、茶道研究の最近の動向を察知し得ます。これは教員の研究費で買われたものではなく、図書館が購入してくれていたものです。

一応全巻の構成を示してみますと、

- | | | | |
|-----|-------|------|--------|
| 第1巻 | 茶道文化論 | 第6巻 | 茶室・露地 |
| 第2巻 | 茶道の歴史 | 第7巻 | 東洋の茶 |
| 第3巻 | 茶事・茶会 | 第8巻 | 茶の湯と科学 |
| 第4巻 | 懷石と菓子 | 第9巻 | 茶と文芸 |
| 第5巻 | 茶の美術 | 第10巻 | 茶の古典 |
- 別巻 海外の茶道

本体価格6,800円〜8,000円（税別）、全11巻合計価格84,400円也となっております。おり、茶道の持つ要素ごとの巻立てとなっております。

当面、私は第1巻の茶道文化論、第2巻の茶道の歴史と第9巻茶と文芸、第10巻の茶の古典を、ざっとしか見ておりません。美的概念に関係しそうな、抽象的・総説的性格のものから着手したわけです。

また、この他に、比較的最近に出版された茶道のシリーズものといえます。『茶道学大系』所収論文等でもちらほら参照されています。『茶道学大系』全十三巻（小学館、一九八三〜一九八七）

本体価格各巻12,000円、別巻1冊のみ3,000円、があります。『茶道学大系』所収論文における参照表示のされ方と値段とから見て、けだし、ちよつと本格的解説付きの豪華図録集ならんと推測していますが、図書館にはござ

いません。比較的最近の知見を総合したものととして、茶道史研究で参照されることが比較的多い文献のようですので、必要だろうと判断しておりますが、予算切れで購入しかねております。

こちらは、参考までに、ナリッジ・ワーカーおよびナクシス・ウェブキヤットでうかがい得た全巻の構成を記しておきます。

- 一 茶の文化
- 二 茶の湯の成立
- 三 千利休
- 四 織部・遠州・宗旦
- 五 茶の湯の展開
- 六 近代の茶の湯
- 七、八 座敷と露地
- 九 書と絵画
- 十〜十二 茶の道具
- 別巻 索引小事典

このように、おおむね茶の湯の歴史展開とその要素に着目した構成が取られているようです。

この『茶道聚錦』が我が附属図書館にないことにも現れています。茶道文化を研究対象とする教員がいらつしやらなかったものでありましょう。茶道史関係の研究書は岡山大学附属図書館にないことが多く、書名を知るたび、ほとんどその都度、一々、発注購入および相互利用によるコピー収集発注とそのタイムラグによって、資料収集に時間をロスすることになっております。本学蔵書の現状では、資料収集もなかなかかどりません。

さて、比較的新しい研究動向を知りつつ、現段階における研究成果を汲み取るためには、まずは、今紹介したようなシリーズものが有用であるうと思われませんが、茶道研究の変遷を知るためには、研究史の総括論文が、当然、必要でありましょう。

今のところ、私の気が付いた範囲内では、『茶道学大系』各巻の巻頭論文、および、巻によつては、各部の最初の論文が、そのような意図をもつて記されているようです。

『茶道学大系』第二巻茶道の歴史の巻頭にはこの巻の編集担当者谷端昭夫氏による「茶道史研究の歩みと展望」がのっております。その冒頭の紹介によりますと、茶道史研究の展開について述べられた文献として、以下のものがあります。今、仮に通し番号を付して記します。

- 1 村井康彦「茶の湯研究の回顧と展望」『茶の湯文化学』一、平成六年）

- 2 谷端昭夫『近世茶道史』(昭和六三年)
- 3 守屋毅「研究の手引・茶」(『日本の古典芸能五 茶・花・香』昭和四五年)

- 4 熊倉功夫「近代茶の湯研究史序説」(『伝統と現代』一〇、昭和四年)

- 5 村井康彦「茶道史研究の回顧と展望」(『芸能史研究』三、昭和八年)

このうち3を除いて、他の四つもまた附属図書館に所蔵されておりません。5の『芸能史研究』は、比較的最近の一九八七年の九七号以降は、日本史の久野先生が購入してくれていますが、芸能史の研究を牽引して来たこの雑誌がないのは、あまりに不便なので、最近バックナンバーを古書で購入し、図書館に納入いたしました。もし御必要の向きはどうぞ御利用下さい。

また、1の『茶の湯文化学』は、『茶道学大系』の複数の巻頭総説にその存在が紹介されており、茶の湯に関する学際的研究を目指して結成された学会誌のようですが、これまた、本学にはありません。これも機会を得ましたら、バックナンバーを購入したいところです。

今、二三の例をあげてみましたが、これだけでももう充分お察しいただけると思いますが、本学の蔵書の現状は、茶の湯研究には全く不向きと言つて良い状態にあります。この研究プロジェクト等によって、状態がおいおい改善されて行くことが望まれます。

二

次に、私が読んだ範囲内で察知されたところの茶道史研究の傾向について述べてみたいと思います。

『茶道学大系』第10巻茶の古典をばらばらとめくってみると、よく伝わって来ますが、茶道史研究においては、最近になつて茶書の諸本研究が本格化したようです。茶書の諸本研究は、それが茶道史研究に新たな知見をもたらしてくれるものとして、驚きと期待といささかの熱っぽさをもつて語られているようです。

ちなみに、諸本研究ということ言えば、日本古典文学研究の分野では、池田亀鑑氏の、『土佐日記』を一例としてなされた先駆的大著もあり、また、文献学と文芸学の対立の一方として(双方ともにその輸入元はドイツ

にありましようけれども)意識され、現在でも、中世・近世など、調査しさえすればいくらでも写本・版本の残っている時代の研究では、「論文」が活発に量産されている分野と言えましようが、現今の、殊に日本近世文学研究の現状から見れば、諸本研究は、それがさかんに行われれば行われるほど、研究者の視野を狭め、各研究を特殊化個別化細分化し、研究全体を分散化させる力として働きますから、研究の趨勢が極端にこれに偏ると、元来何のためにそれが行われていたのが忘れ去られてしまふといった事も起こり、認識の大局的進展を阻害する方向に働きかねないもののように思われます。私などには、何につけ、中庸というものが必要と思われますが、研究者は研究論文を書かねばなりませんから、調べたら確実に1本「論文」なるものが書けるこの分野に力を傾注する余り、いつのまにかミイラ取りがミイラ、という状態にも陥りがちなものようです。このような現状をいささか憂えている私などからすれば、茶道研究がこれに熱中し始めているらしき昨今の熱を帯びた書かれ方を見るにつけ、「それはそんなに浮かれるほどの解明力は持たないかもしれない分野なんですよ」と一言言つてみたくなる気持ちを抑えることはできませんが、認識の基礎として必要な分野であることは否定できません。

それはともかくとして、彼等に諸本研究の必要性を痛感させた経験は、比較的最近(一九七五〜八四)にあつたようです。複数の『茶道学大系』巻頭総説その他に、その経験は紹介されていますが、それは、前回の山口発表でも書名が紹介されていた、千利休の弟子の一人であり、また、豊臣秀吉の茶堂としては利休の同僚とも言え、そして、利休と同様、秀吉に切腹させられた茶人である、山上宗二が記した茶書『山上宗二記』に関するものです。

それまでは、基本的に茶道史研究は、『茶道古典全集』所収の翻刻文献を中心として行われて来たらしいのですが、まさにその信頼すべき『茶道古典全集』所収の『山上宗二記』テキストに問題があつた、ということが、彼らの得た衝撃の核心であつたようです。

かつて、利休の教えを伝える聖典視すらもされた『南方録』が、江戸時代も百年を過ぎようとする貞享年間の成立であることが確実視され、その使用に極度の慎重さを求められる資料と成り下がった今、『山上宗二記』

は、茶道を大成したと位置付けられる利休時代の茶法・茶器について教えてくれる、ほとんど唯一と言ってよいほどの史料であり（もちろん他に茶会記（茶会の記録）の類は存在しますが、茶会記は個人の茶の湯認識を直接伝えてくれる性質のものではありませんし、信頼するに足る利休本人の茶会記は存在しないようです）、それ以前の茶の湯の歴史に關しても、『山上宗二記』に記された認識が使用されて考察されている部分が非常に多うございますので、その衝撃たるや、非常に大きいものがあつたようです。

今、その概略を伝える筒井宏一氏の『茶書の研究』（淡交社、二〇〇三）第一章「茶書の創成」第三節『山上宗二記』の三、『山上宗二記』の諸本研究』に記されるところを、さらにつづめて、あらあら紹介してみますと、

一九七五・六年、五島美術館「茶書展」Ⅰ・Ⅱに、天正十六年二月奥書のある不審菴文庫蔵『山上宗二記』（卷子本、岩屋寺宛）が出品されました。

それまで『茶道古典全集』等によって知られていたものは、全て、一年後の天正十七年二月、江雪斎宛本の一種のみで、それが流布本として定着していたそうです。

その不審菴文庫本が、一九八四年になつて『特別展図録 茶の美術』（東京国立博物館）に全丁写真掲載されました。それによつて、不審菴文庫本の本文の全貌が容易に知られるようになり、従来の流布本の処々に、転写の段階で、宗二が書いていた文章に錯簡が生じ、文意が通じなくなった部分があることが知られるようになった、と言います。

同年、茶の湯懇話会が成立、「不審菴本出現の衝撃をもつとも真摯に受けとめ」（『山上宗二記研究』二（財団法人三徳庵、一九九四）「あとがき」）、『山上宗二記』研究に着手、その後の探索によつて、その存在が明らかになつた諸本は二十五本を越え、結果、現在、天正十六年正月本・同年二月本・同年五月本・天正十七年二月本・同年三月本が知られているようです。

その研究の成果は、『山上宗二記研究』一・三（三徳庵、一九九三・一九九四・一九九七）として刊行されていますが（一はすでに品切れ状態、三は、一九九五年五島美術館特別展「山上宗二記―天正十四年の眼」にお

いて行われた、同年十一月「山上宗二記シンポジウム」の記録）、余りに多くの諸本の存在が一挙に知られるようになり、また、宗二自身の改稿による本文の変動という事情も確実視されるようになったために、それらを総合し、最善の校本を作成するという作業は放棄され、まだそれ以後の課題として残されているようです。

ですから、現状、前掲『山上宗二記研究』二（一九九四）には、武田家乙本（天正十六年二月、岩屋寺宛。不審菴文庫本にきわめて近い本文を持つ）と、土屋家本（天正十六年正月）が翻刻され、五島美術館特別展「山上宗二記―天正十四年の眼」図録（一九九五）には、齋田記念館本（齋田文化振興財団所蔵、天正十六年正月、安養院宛）が翻刻され、と、複数の本文が同時に提供されるという事態となつており、本文比較研究論文（現段階での最終結論的なものは、前掲『山上宗二記研究』三（一九九七）所収）は執筆されておりますが、一目で本文の異同が見知される形態での本文提供は行われていないようです。

さて、このような経験を経て、あるいは、他に名物記の類全般を対象として大規模な総合的諸本研究に着手する研究者が現れたりもして、現在進行形で、茶道史研究中に、諸本研究は着々とその地歩を固めつつある、という情勢にあるようです。

ですが、問題は、当然、我々は、その後どう茶道史認識を改めるべきなのか、あるいは、結局認識を改める必要までは生じなかったのか、という点にあります。殊に、利休時代（あるいは、それ以前）の茶道史唯一の根本史料たる『山上宗二記』に關して、その流布本のテクストに錯簡と思われる異同が処々にあり、また、構成上の異同すらもその諸本間に存在しているということまでが、今日知られております以上、これは茶道史を考える上で重大な問題ですが、近年になつて一挙に多くの研究が発表されておりますので、残念ながら、今の私には充分な咀嚼ができておりません。

本日お伝えすることができるのは、少なくとも『山上宗二記』を、『茶道古典全集』（あるいは、それ以前の翻刻紹介文献）で読んで、何かを考へてはいけない、ということだけです。そのことだけをお伝えして、本日は、この問題から離れざるを得ません。なお、『山上宗二記研究』の二、三は、すでに図書館に購入済みであることを付け加えておきます。

三

先にも御紹介しました『茶道学大系』第二巻は「茶道の歴史」として立てられております。これを見て非常に印象付けられることは、茶道の歴史を体系的に語ってはいないということですが。

この巻に収められているのは各論でありまして、述べられているのはこれまで研究史的に手薄だった分野ばかり、すなわち、本巻所収論文は、研究を先に進めているのであって、これまでの成果を、あるいは、研究史を、包括的に総合しようとする意図はきわめて薄い、と言わざるを得ません。ですから、端的に言って、この巻を読んだからと言って、茶道史に関する基本情報が把握できる訳ではないようです。その割には、今日、信頼すべき茶道史文献を紹介しようとする、まとまった部分も見当たらず、私をふくめて一般読者にとつては、きわめて不親切な内容となっております。買って見てがっかりです。

特に印象的なのは、(それは、前掲茶道史研究総括論文の3、守屋「研究の手引き」を見れば否応なしに印象に残る、これまでの研究史の偏向への反省の結果と思われるが)素人が最も知りたいであろう、歴史上の茶人、各個人についての研究情報の紹介の完全なる(と言いつつ切ってしまう)でも良いだろうと思えますが(本シリーズは「体系」ではなく、「大系」なので)から、それは無いものねだりにすぎない、ということになるのかもしれないが)。

まあ、研究者としては、そういったことは他で勉強した上で、この本を読め、ということなのでしょうが、それはさておき、茶道史研究がこうした段階にあるということ、これがまた、ここでお話しすべきことならならぬのではないか、と思われまします。

要するに、(私の僻目にすぎないかもしれませんが)茶道史は、専門的には、各要素、及び、腑分けされた各事象、に細分化されて語られる段階にある、ということの本巻は示しているように思われます。

そして、こうしたことは日本近世文学史研究でもおなじみのことなのですが、そうした場合、研究者はある個別事象の説明をし、事象に即した分析・考察をすれば「論文」を執筆することができ、それが、より大きなどうという問題の解明につながっていくのか、元来何が本質的な問題だったの

か、ということが忘れ去られてしまふ、ということが生じがちであるように思われます。

では、「茶道」の成立を考える上で、何が本質的な問題となるか。茶道史について勉強し始めたばかりの私がそれについて指定することはまことに不遜ではありますが、私には、あれが「所作」(普通「点前」と呼ばれるらしいですが、私が承知しているところの「所作」は、芸能の一つ歌舞伎について使用される語です)をふくんだ上で成立したらしい(いつの時点を「成立」というのか、もまた、問題ですが、今は漠然と利休前後を考えておきます。「茶道」の語の使用は、それより遅れるとされます)、ということが非常に重要な問題のように思われます。

先の研究史総括論文1と5、昭和三八年(一九六三)と平成六年(一九九四)に、三十年もの年月をはさんで、学会を異にして研究史の総括論文を担当している(それはそれなりの重みを示している事実であろうと、これから御紹介申し上げる、氏の『千利休』の論述にうかがい得る冷静さ・明晰性を根拠に、私は推測しています)村井康彦氏が、その著書『千利休』(講談社学術文庫16391-2004。NHKブックスとして出された一九七七年改訂版による。初版は日本放送出版協会、一九七二)「利休と茶湯——むすびにかえて——」p.330で

茶湯に対する感想なり批判としてしばしば口にされるのが、この点前作法の煩瑣、堅苦しさである。どうして茶をわざわざ堅苦しい思いをして飲まねばならないのだ、というのは、多くの人々の抱く実感であるにちがいない。

と述べ、この箇所に関して、その講談社学術文庫版「解説」で熊倉功夫氏が

村井さんから若き日の体験としてうかがったことがある。それは伝統芸術の会(——同じ「解説」の中で、「村井さんは学部生のころから、林屋辰三郎先生のご縁で「伝統芸術の会」に関係した。その後、芸能史研究会の発足とともにその中軸となった」と触れられています。「芸能史研究会」は、先に紹介した雑誌『芸能史研究』の発行母体です。

本書奥の略歴によれば、村井氏は一九三〇年生まれですから、文中の「学部生」を仮に二〇歳とすると、概算で一九五〇年のことになりま

す。——(山本注)で茶の湯を取りあげたとき、学生であった村井さんが司会をしていた。すると会場から突然、岡本太郎さんが質問して「どうして……」とさきの疑問を呈したという。これにどうこたえるかが、村井さんの茶の湯研究の一つの出発点になっている。

これは私の感覚が一般性を持つ可能性を保証してくれている一資料なのですが、すなわち、我々の感覚で言うところ、無くてもよいと思われる要素、それが無くてもならない要素となつていくところ、この要素の、考察対象としての重要性が看取されるのだと思います。

茶の湯は、なぜ所作を保持しなければならなかったのか。茶室は、それはそれで一風風変わりな建築物として、美とも感じ得ましよう。茶碗もまた美であり得ましよう(歪んでいる物もふくめて)。種々道具類もまたしかり、掛け軸もまたしかり。

そして、我々は、定められた所作をもまた美としてとらえなければならぬことを要請されているのでしよう。では、なぜ所作は美なのか。

実は、茶室も茶碗も種々道具類も掛け軸も、そして所作も、あるものが美であり、あるものがそれに劣る、といった価値の序列・体系は、「茶道」の内部では)決して我々それぞれの感覚が産み出すものではありません。それは「茶道」の内部に入ったときに、既にあるものとして一括して与えられるものとしてありましよう。もちろん「茶道」の深奥にまで通じたときに、それを個人的に改変する余地はあるにしても。

とすれば、やはり、そこに、ある権威ある者が産み出す「型」を美とする文化の存在を、そして、その改変を容易に許そうとはしない文化の存在を、我々は考えるべきなのではないでしょうか。

だとすれば、私には、成立時の茶道を支えている美意識を、茶道のみをとらえて考究してはいけけないのだからと思われます。私にはいまだまったく不案内な分野ですので、まったくの見当違いの可能性もありますが、たとえば小笠原流躰方の定着、等と関連させた考察などは不要なのではないか(もつとも、すでに考究がなされていることを知らないだけという可能性も大あります)。

たとえば、前回の山口発表でも名前の出ていた谷川徹三氏の『茶の美学』

では、茶を構成している重要なファクターとして四つの要素を提示した、と言います。

「と言います」と今言いますのは、私は今、筒井紘一氏の「茶道点前の成立」(『茶の湯事始』講談社学術文庫2002九二九二。初版講談社一九八六。所収論文の初出情報は記していない)によって、谷川氏の説を孫紹介しようとしているのですが、筒井氏の紹介によりますと、谷川氏が茶の重要な四つのファクターとしたものは、おおむね

- ① 社交的なもの
- ② 修業的なもの
- ③ 芸術的なもの
- ④ 儀式的なもの

である、と言います。

(ちなみに、単行本としての谷川『茶の美学』には、ウェブキャストで知る限りにおいて、生活社版日本叢書二〇一九四五年発行(昭和十九年(一九四四)十一月十二日、茶道文化研究会に於ける講演を収録したものという)と淡交社一九七七年発行の二種あるようです。少なくとも『茶の美学』淡交社版の方は、現在、附属図書館に所蔵されていないようですから、二種の内容上の関連は不明、筒井氏の言う『茶の美学』が、この二種のうちのどちらなのかも未詳です(あるいは、どちらも、なのかもしれません。)

① 社交的要素は、一人で茶を飲むのではない限り、他人に対する配慮で発し得ます。一人で飲む茶の方式が「茶道」になつてもよかつたはずですが、それは文化的に重要とされなかつたということでしょう。「茶道」は基本的に見られる形式であつたと言えましよう。② 修行は、何かに通暁しようとした場合、何にでも発し得る要素でしょう。それに関して、『山上宗二記』あるいは『南方録』その他に顕著に見られる禅宗修行との同関係は、当時の文化的環境から見て、容易に「茶道」内部に取り込まれ得ます。③ 芸術的要素も、茶室・庭・使用する道具・掛け軸等、良い物が使用したければ(あるいは、意図的に悪とされる物を使用した場合も含めて)容易に取り込み得ます。そして、④の儀式的要素・儀礼的要素もまた、同様に、当時の文化との関連が探られるべきだ、と一応、学的課題として想定し得ます。一昔流行のパフォーマンスとしての注目・考察が「茶道」

に関してほどこされたかどうか、これもまだこれから確認しなければなりません。が、「茶道」をしぐさの文化の一環としてとらえる、視野を広げた考察の必要は、このように論理的帰結として想定されます。

私には、結局茶の湯は、文化的諸要素を雪達磨式に取り込んで成立した雪達磨の固定が、部分的改変をふくんだ上で図られようとしたものの、のように見透されます。その核は、おそらく、もてなしの体験としての心地好さのみなのではないか。そして、だとすれば、雪達磨式に取り込まれた、どの諸要素も、生活を飾る「ファッション」としての意味を持つ（あるいは、しか持っていない）のではないかと考えられます。ファッションは記号としての意味しか持たない本質のないものでしょう。結局どのよう高い抽象的価値を持つものも、良くも悪しくも生活のレベルで取り込んでしまう文化的構造を、私は茶の湯に見て取るべきなのではないか、と思います。

そのことは、茶禪一致論に端的に看取されるのではないのでしょうか。「茶を飲むことが悟りを開く禪に通じる」。これはいかにも禪の日本の変容、禪の日常レベルへの引き下げとしか言いようがないのではないのでしょうか。たとえば、このようなことを言って、小乗仏教を伝える東南アジア諸国、あるいは、密教の最終段階を伝えるチベット、等で、受け入れられる余地があるかどうか、私には、そこに関心を働かせるべきなのではないかと思われれます。

また、茶の湯を雪達磨として見た場合、その具体物質的核が、ほかならぬ「茶」であるということ、これまた、「茶道」の存在を前提として研究してしまうことになるであろう茶道研究ではおそらく見過ごされることになりがちであろう本質的な問題であろうと思われれます。茶の湯を外部の視点から見た時、なにゆえ「茶」が選択されることになったのか、その説明が必須であることが初めて顕在化します。もちろん、これに関しても、すでに研究があることを私が知らないだけかもしれませんが、今後なお、先行研究を探らなければなりません。特に歌舞伎・民俗芸能・興行制度史・茶の伝播に関して詳細な研究を発表して居られる守屋毅氏が中心となつたと思われるシンポジウムの記録『茶の文化——その総合的研究』第一部・第二部（淡交社、一九八二）の存在は、気にかかっているとありますが、

これまた附属図書館になく、版元品切れ状態で、いまだ見るを得ておりません。

なお、筒井氏の著作を利用したついでに、前回の山口先生の発表内容と関わる説を、補足紹介しておきます。筒井前掲論文の「はじめに」に、先の谷川氏の見方の紹介に続いて、次に引く林屋辰三郎氏の見方が紹介されています。

林屋辰三郎氏は『日本芸能の世界』のなかで、茶会を総合芸術ととらえ、具体的に演劇と比して次のように述べている。

- ① 演劇を構成する俳優は茶会を催す亭主
 - ② 劇場は茶室
 - ③ 観客は茶会に招かれた客人
 - ④ 台本は茶会記
- であるといい、以上の四つの要素の調和が茶会芸術の完成であると考えている。

この見方は、能と茶の相同について考える際に、林屋氏の著作が参照されるべき研究文献の一つであることを示しているでしょう。

四

雪達磨としての茶の湯は、当然表層に通時的変化を来たします。

前掲『茶道学大系』第二巻茶道の歴史所収谷端総説論文の「基礎史料の公刊」の(一)「中世の飲茶について」冒頭(p.7)に、簡明に

鎌倉・室町期の飲茶については室町後期以降に現れる形態——いわゆる「わび茶」の出現とそれ以前ではいささか様相が異なっており、後期以前にはいくらかの形態が平行して行われていたことが想定されている。「会所」における室礼のなかの飲茶、禅宗寺院における茶礼、また闘茶や路傍での飲茶（一服一銭）などである。

とあります。

つまり、本来、「わび茶」と、その他の飲茶に、価値的差異などはないはずで、それが「わび」的要素が価値の表層に、大きく表面積を広げ、支配的パラダイムとも意識されるようになった、ということですから。これに囚われ、これを本質視することは、幻想とも言い得ましよう。

後に支配的要素となったものか、もともと支配的要素であったものか、

これについては、注意深く観察し、感わされないようにしなければなりません。

たとえば、『茶道学大系』九茶と文芸(二〇〇一)所収森川昭氏「茶の湯と俳諧」の一「茶の湯と俳諧と」p.138で次のように言われています。

茶の湯と季節感の親しさは、茶事の歳時の全体から、茶席の菓子に至るまで、切っても切れない関係にあることはいまでもない。

そして、それを前提として、連句の、各季節に関わる付け合いに見られる連想と、茶の湯の道具組(掛け物の古歌・各道具の銘)に見られる季節への配慮に共通性が見られるのではないかと、ということをも、延宝四年(一六七六)の芭蕉連句の一部および同年刊の付合辞書『類船集』と、一方、昭和九年という近代ももう遅い時期の高橋箒庵の『十二ヶ月茶の湯』の道具組の一例を対照させて論じていますが、使用している書物の年代の余りの隔たりもさることながら、その前提として述べられている認識そのものが非歴史的な認識であるかもしれない可能性に、論者は無自覚である、と言わざるを得ないようです。

たとえば、熊倉功夫氏の「茶の湯の連歌的性格」(『国文学 解釈と教材の研究』一九九八年十二月)に次のように述べられています。少し長くなりますが、引用してみます。(傍線山本)

少なくとも茶の湯の季節感や趣向が明確に意識されるのは十八世紀以降ではないかと思う。つまり、俳諧趣味の発達が、茶の湯における連歌的性格をかえって強化するのではないか(p.106)

連歌における付け合いの技法や見立の趣向は、そのまま茶会の道具組み、趣向と共通するようにいわれてきた。また私自身、そのように述べてきたが、正確には、茶の湯においてこうした技法が前面に出てくるのは十八世紀のことで、十六世紀の紹鷗や利休の時代には、ほとんど、そうした工夫は生まれである。道具組みでも、あまり変化はなく、ことに一定の道具ははじめからセットになっていて……、一点ずつ自由に取合せて物語りをつくるということはなかったのである。

季節感についても同様のことがいえる。……初期の茶会には季節感がまこととほしい。せいぜい季節を表現するのは花であるが、その花も常に床に出されるわけではなく、興味も薄かったのか、茶会記に

花の記載がない場合が多い。……また初期茶会では梅、椿、水仙、菊がほとんどで、奇妙なほど季節離れた花が用いられることも珍しくない。

道具の取合せや花によって茶会の趣向を物語りに表現するには、道具にそれぞれ物語りの要素となる銘や書付けが必要であるが、初期の道具にはほとんどそれが無い。逆にいえば、季節を表し、趣向(例えば祝意など)を表現する銘などが道具に豊富に付せられるようになるのは十八世紀の家元制の確立期以降であろう。(p.111)

森川氏は、俳諧研究の専門家ではありますが、茶の湯研究の専門家ではない。茶の湯に関する考察は——いや、何についてもそうですが、今の我々が(実は)無根拠に有している固定概念の、史的知識による相対化の作業と無縁のところでは成立し得ません。

以上、種々様々なレベルの問題を羅列する雑駁な報告に終始しましたが、本日の発表を終わらせていただきます。